夕焼け通信 1360号　2022.7.11
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）106

木幡智恵美

二人暮らし（3）

七月に入って最初の週末、夕方の散歩に出たら雨が降り出した。その夜、関東、東海が豪雨で、熱海では大規模な土砂崩れが起きたとのニュースにびっくり。熱海からそう遠くない御殿場にいる長男が心配だ。メールを入れるが返事はない。返信する暇もなく、現場での対応をしているのだろう。携帯の音で目が覚めたのは夜中。「生きてるよ！土砂崩れで大変だったよ」とのこと。夜を徹して道路になだれ込んだ土砂を取り除く作業をしているようだ。高速道路のメンテナンス会社にいる長男は、豪雨の時は土砂の掻き出し、冬は雪かきで大忙しだという。ちょっとした不具合でも、高速道路では大事故につながるのだ。

それから間もなく、島根の豪雨が全国ニュースになった。今度は長男から心配の電話。こちらの無事を伝え、熱海の大惨事のことや、今も続く作業の話を聞く。続いて二男からも、「大丈夫？」とのメール、そして同期からも次々に入ってきた。しかし、何かあるといつもメールをくれていたMからはない。そうか、もう居ないんだと改めて思う。

雨が降り続く中、娘と孫たちがやってきた。小学校は休校で、保育園からも、たまたま休みだった娘に、「保護者がいるところは登園を控えるように」との連絡があったようだ。急なことだったので、酢鶏だけを慌てて作り、あとは残り物で昼食。お陰で、冷蔵庫の整理ができた。雨で外にも出られず、ブロックをしたり、お絵かきをしたり。宗矢はなかなか聞かん坊で、「だめ」と言っても、すぐには止めない。「この調子だわね」と言う娘に、「雄二はもっとすごかったよ。このくらいの時にあんたと義一と二人泣かせてるからね」と返す。今頃、福井でくしゃみをしていることだろう。

小学校は週末まで休校、保育園は通常通りになったけれど、宗矢が中耳炎になり、熱を出したということで、男の子二人を引き続き預かることになった。寛大はジジに任せ、私は熱のある宗矢の相手。三十八度台から下がらず、やんちゃを言うけど、お茶は飲むし、昼食もそこそこ摂ってくれるのには助かる。線香を点けると「あち、あち」、分かったという意味の「うん」を言う。次の日もやはり熱は下がらず、少し遊んではぐったりし、ぐずぐず言い続けた。雨が上がること、宗矢の熱が下がることを祈りながら孫たちと家に籠っていた。

がらがら橋日記

宮森健次

700円

就労以来、仕事の内容はほとんど草取りばかりなのだが、本来はもっともっと多岐の要請に応じる。利用者と作業者のマッチングをする仲介者があり、それぞれの合意で事が運ぶ。利用者は一時間につき千円を支払い、そのうちの七〇〇円を作業者が、三〇〇円を運営側が受け取る。交通費などの必要経費は別にもらうけれど、それ以外はすべて一律で、技術や資格の有無は考慮されない。あくまで素人のお手伝いです、ということになっている。

給与が銀行に振り込まれるようになって三十年以上経つので、報酬として現金を受け取るなんて長らく忘れていた。「お世話になりました」と言って利用者から渡される七〇〇円なり千四百円なりを受け取って財布に収めるという行為がとても新鮮に思える。それはつまり、どのように働こうと月々決まった額が振り込まれることに慣れきって、無感覚になっていたことの証拠でもある。手のひらに乗った七〇〇円を眺めていると、偏った金銭感覚に疑問を抱くこともなく今日まで来てしまったのだと思えてくる。

島根県の最低賃金は、八二四円。全国平均は九三〇円。ちなみに最も高いのは東京で一〇四一円、低いのは沖縄県で八二〇円である。七〇〇円はそれらと比較してもぐんと低いのであるが、雇用関係にあるのじゃなし、拘束時間も自分で決められるし、職務命令に縛られることもなく嫌なことはしないで済むので、有償ボランティアの報酬としては適正の範囲だと思う。この間は、請求額を見た老婦人から、

「そぎゃんことでいいかね。あんま安て気の毒なあがね。」

と言われてしまったが。

さてこの七〇〇円、いつの間にかぼくの中で一つの尺度になった。例えばスーパーで食材を買う。これは、炎暑の下でボタボタと汗を垂らしながら草を取った〇時間と等価なのだ、とつい仕事のしんどさや疲労度を単位に価格を計ってしまう。高額だと、それだけの金を得るためにはどれだけ草を取らなければならないか、と考える。それを理由に倹約に走るとか十円でも安い物を探すなどはしないまでも、薄ぼんやりしていた金額に対する反応が具体的になったうえに、ずいぶん生々しくなった。これまでとは焦点距離の違うレンズで見ているような感じだ。この距離感は大事にした方がいいなと思う。時給三〇〇円のあり得ない給料が制度を隠れ蓑にまかり通ったり、十億の年収ですら不足の人間が会社経営していたりする世の中で、目くらましに遭わないためにも必要なんじゃないかと思うのだ。

30代フリーター　やあ、ジイさん。この物価高どこまで続くんだ。

年金生活者　そのおかげでいま資本主義は水を得た魚のようになっているのではないか。

30代　しんどそうに見えるけどな。

年金　ロシアのウクライナ侵略で加速したインフレで、富の稀少の縮減にブレーキがかかり、パイを奪い合う競争が激化して、利潤の源泉が広がり出したと考えられる。

　資本主義を駆動するのは競争であり、競争を必然化するのは富の稀少性だ。稀少性の目に見える形が辺境であり、辺境の富の稀少性と開発済みの地域の富の豊富さとの落差が利潤の源泉となる。開発された地域からの辺境への投資が利潤を生む。

　グローバル化した資本主義はその辺境を急速に狭め、富の稀少性の縮減を加速した。テクノロジーの発達にともなう絶えざるイノベーションがそれを可能にした。それは「生産性を最適状態まで押し上げ、『限界費用（マージナルコスト）』、すなわち財を一単位（ユニット）追加で生産したりサービスを一ユニット増やしたりするのにかかる費用がほぼゼロに近づくことを意味する」（ジェレミー・リフキン『限界費用ゼロ社会』柴田裕之訳）。つまり利潤の源泉が縮小したということだ。

30代　資本主義の終焉が言われるようになった。

年金　その危機を乗り超えようとして資本主義が目指し始めたのが稀少性の復活であり、言い換えれば辺境の人為的な復元にほかならない。「脱炭素」はその代表例だ。まだ使える化石燃料を捨てることによって稀少性を取り戻し、開発地を辺境に後戻りさせることをもくろんでいる。

　ロシアのウクライナ侵略はその必要性を低下させつつある。大規模な経済制裁でロシア産の石油に頼れなくなった西側諸国はそのぶん放っておいても「脱炭素」に向かうことになったからだ。つまり、稀少性への回帰、辺境の復活が否応なく始まった。世界的な物価高、インフレはそのあらわれであり、景気拡大は資本主義が利潤の源泉を拡大していることの証左だ。

　おそらく資本主義は「脱炭素」政策をこれまでほど必要としなくなり、今後それを徐々に放棄していくだろう。

30代　経済制裁の影響でロシア経済が「ソ連化」する可能性がある、と朝日新聞が報じている（7月3日朝刊）。

年金　経済を武器とした世界規模の「戦争」が、ロシアはもちろん、西側諸国の政府を経済に対する統制強化に向かわせ、かつての東西冷戦が形を変えて再現される可能性がある。

　朝日新聞の記事は、自動車産業を例にあげ、ハイテク部品の入手が経済制裁で困難になったため、ロシアの自動車最大手「アフトバズ」が公表した主力車「ラーダ」の最新モデルはエアバッグもＡＢＳもないと伝えている。

　記事の言う「ソ連化」とは、直接には古い技術への後退を指している。それを巨視的な観点から見れば、これまで縮減の進んできた富の稀少性が復活することを意味する。稀少な富の分配は市場にまかせると、偏り過ぎるので、国家が再分配に乗り出す。それが統制経済であり、ソ連はそれを約70年間続けた。

　その間に進んだ産業のソフト化は絶え間ないイノベーションを企業に強い、市場に自由のないソ連はそれに対応できず、統制を続ける政府の崩壊を招いた。ロシアが「ソ連化」すれば、いずれ似た道をたどらざるを得ない。そのときふたたび安い労働力の提供国となる可能性がある。世界経済の第2のグローバル化、バージョンアップしたグローバル化が始まるだろう。

30代　肝心のわが日本はどうなるんだ。

年金　インフレの影響はメンタルな面にも及んでいる。「承認欲求」という言葉がいつのころからか浅ましく愚かな欲求を指す言葉としてネット上で語られるようになった。「承認欲求モンスター」といったぐあいに。この欲求が満たされないことにストレスを感じ、あたかもそんな欲求は自分にはないかのように思いたいために、他人を避難、揶揄しているように見える。

30代　それインフレと関係あるのか。

年金　人びとの「承認欲求」が強まった理由は、消費の過剰化にともなって国家の権力の一部が諸個人に分散し、それを手にしたひとりひとりが相応の処遇を求めるようになったことにある。ところが、それに応じ得る富の豊かさがインフレで後退し始めた。人びとは欲求不満を募らせ、欲求の抑圧へと向かい始めた。

　東西冷戦の終結で資本主義のグローバル化が進み、世界経済の基調はインフレからデフレに変わった。それが企業をイノベーションに駆り立て、富の稀少性の縮減を加速し、個人の家計の選択的消費を拡大した。それは諸個人が国家権力の一部を分け持つようになったことを意味する。

　ところが、ここにきてインフレへの再転換が始まった。富の稀少性の縮減にブレーキがかかり、承認欲求を満たす条件のひとつが棄損し始めた。

　この経緯をひと言で言うなら、承認欲求はデフレによって高まり、インフレによって満たされる機会を奪われたということだ。欲求不満に耐えるために、欲求などないかのように考えようとして、その欲求をおとしめる。それがＳＮＳ上で広がっていることだ。

ニュース日記　838

中村　礼治

インフレが変える社会